



|                  |                                                                                                         |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 都市に暮らす若者の幸福観：タシケント市の大学生への質問票調査から                                                                        |
| Author(s)        | 土居, 海斗                                                                                                  |
| Citation         | 日本中央アジア学会報, 20, 62-63                                                                                   |
| Issue Date       | 2024-11-30                                                                                              |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/jacas.20.62">https://doi.org/10.14943/jacas.20.62</a>                 |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/98889">https://hdl.handle.net/2115/98889</a>                       |
| Rights(URL)      | <a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a> |
| Type             | journal article                                                                                         |
| File Information | JB20_006doi.pdf                                                                                         |



## 都市に暮らす若者の幸福観 — タシケント市の大学生への質問票調査から —

土居 海斗

旧ソ連圏および中東欧の移行諸国を対象とした移行幸福感研究では、移行諸国の幸福度は他の地域と比較して低く、特に経済状況と強い相関を持つことが示されてきた。しかしながら近年の研究では、中央アジアでは客観的経済指標は貧しいが幸福度は高いという正反対な傾向が指摘されている。このパズルに対して、そもそも幸福の定義や意味が文化や社会生態学的環境によって異なることが指摘される[内田・荻原 2012]。既存の移行幸福感研究では主に幸福のレベルや決定要因に関する国際比較に重点が置かれてきたため、幸福の概念そのものや概念の文化差に関する研究はほとんど進んでいない。中央アジアの幸福感の独自の特徴を解明するうえで、マクロな社会とミクロな心理的表現の相互関係を前提とした、地域に特有の幸福概念の理解は必須である。そこで本報告では、質的データと量的データを組み合わせた混合研究法によって、ウズベキスタンの文化に埋め込まれた若者の幸福概念を幸福の定義と対象の観点から明らかにし、幸福像をマッピングした。また、幸福の定義、対象、レベルの複雑な相互関係も詳細に検証した。

質問票調査はタシケント市に所在するウエストミンスター国際大学タシケント校において実施し、145名の大学生から回答を得た。幸福の定義に関しては自由記述式のエッセイ(「あなたにとって幸せとは何ですか」)から把握した。幸福の対象(「自分」、「親」、「きょうだい」、「親族」、「隣人」、「友人」、「大切な人」)についてはそれぞれ5段階で回答する自己評価型の設問を用いた。幸福度についてはその程度を10段階で評価する設問を用いた。

エッセイの主題分析の結果、幸福の定義として、生活領域、心理的側面、抽象的概念という3つの大きな主題が得られた。生活領域はさらに「家族」、「社会関係」、「健康」、「仕事とお金」、「宗教」、「生活全般」、「教育」というカテゴリーに分類され、その順で回答数が多かった。心理的側面も同様に「達成・成長」、「調和」、「感情」、「自由・自己決定」、「認識」、「満足感」、「人生の意義」というカテゴリーに分割され、その順で回答数が多かった。また、幸福の対象については、「親や家族の幸せ」、「個人の幸せ」、「親族や隣人、友人の幸せ」の順で重要とされた。

さらに、同質的な幸福の定義を有する個人をグループ化するためにクラスター分析を用いた

結果、6つの異なる幸福像が生成された。調和と満足感を重視する「安らぎ志向層」、感情、認識、抽象的概念を重視する「感性志向層」、社会関係、宗教を重視する「人間関係重視層」、仕事とお金、自由・自己決定を重視する「自己追求層」、達成・成長を重視する「達成感追求層」、家族を重視する「家族重視層」である。ここで「感性志向層」、「自己追求層」、「達成感追求層」はより個人志向の幸福観を、「安らぎ志向層」、「人間関係重視層」、「家族重視層」はより集団志向の幸福観を反映している。そして、個人志向の幸福観を持つクラスターでは「個人の幸せ」が、集団志向の幸福観を持つクラスターでは「親や家族の幸せ」がより重視された。さらに、クラスター間で幸福度に差異がみられ、幸福度が最も高いのは「人間関係重視層」で、最も低いのは「安らぎ志向層」であった。

上記の結果を吟味すると、次のような含意が得られる。第一に、ウズベキスタンの若者の間には、個人主義的な幸福観（個人の主体性や達成感の重視）と集団主義的な幸福観（調和のとれた家族関係や対人関係の重視）が共存していることである。伝統的に集団主義的な社会とされるウズベキスタンにおける異なる志向性の幸福観の共存は、近年の社会経済的変化に伴う価値観やライフスタイル、社会規範の変化を反映している可能性がある。これは近代化が経済発展や社会変化を導き、伝統的価値観の衰退と個人主義的価値観の台頭をもたらすという近代化理論によって説明される[Hamamura 2012]。一方、文化遺産理論によれば、いくら社会経済的変容期にあっても、文化などの広範な信念体系が変化しない限り、伝統的価値観は持続し続ける。つまり、ウズベキスタンの文化に固有な集団主義的な価値観もまた存在し得るのである。特に、このような幸福観の共存は高学歴層の若者にとって特徴的であると考えられる。第二に、幸福をどのように定義するかは、幸福の対象やレベルと大きく関連するということである。つまり、個人は幸福の概念に導かれて心理的表現を行うことを示唆している。これは幸福の概念を見過してきた移行幸福感研究に欠けた観点であり、移行諸国と中央アジアの幸福感に関する相違は、幸福の概念の文化差によって説明される可能性を示唆している。しかしながら本調査の参加者の属性には不均衡があることから、幅広い世代や地域を対象としたさらなる調査が求められる。

## 参考文献

- Hamamura, T. 2012. "Are Cultures Becoming Individualistic? A Cross-Temporal Comparison of Individualism–Collectivism in the United States and Japan," *Personality and Social Psychology Review* 16(1), pp. 3–24.
- 内田由紀子・荻原祐二 2012 「文化的幸福観——文化心理学的知見と将来への展望——」『心理学評論』55、26–42頁。

※本研究はJSPS科研費JP23K18821の助成による研究成果の一部である。

(アジア経済研究所)